

なかりし所の民。ぶ。の田とよび侍りき、神武を傳へあやまると見えたる、京兆の命をえけて、土を重ね垣をゆひて、土民近づく事を得ず、其外あまたの陵も皆かくの如し、誠に昭代の御政おほき中にも、是等こそ唐土までも聞えて目出度御事なめりといふ、知慎心の中におもひ合せ侍りぬ、されどことに出すべきことならねばげにもとのみ云てやみぬ、かくて曉ちかきころ夢に我兄を見侍るに、其よはひ三十にたらぬほどに見えて、容貌ことにうれしげにうち笑ひ給ふが、忽然として見え給はず、夢心地にまことに世をさり給ひし人也と考たはしく悲しかりしが、又考ばし有て同じさまに見え給ふが、夢に見奉るとはおほけれども、かくうるはしくよろこばしき有様は侍らず、まさしく是はきのふのくれ、帝陵の御事とも申侍りしを悦給ふならむとおもふになつかしき事も又やるかたなし、

元祿十二己卯歳九月廿八日雨そぼ降日、淺草の郷如意菴の南の窓のもとに識す、

細井知慎

〔常憲院殿御實紀三十九〕元祿十二年四月廿九日、こゝに本朝元弘建武の大亂以後、古帝王の寢陵荒廢して、其ありかたしかならず、樵牧雉兎の蹊徑となりき、然るを數百年をへて修治する事もなし、是一大闕典といふべし、考かるを當代感じ思召旨ありて、この年頃御料は代官、私領は領主に仰ごと下り、あまねく古跡を搜索せしめ、藩籬をまうけ、樵采を禁せられしに、この月その事成功せるよし、京職松平紀伊守信庸より注進す。略中すべて神武天皇より後花園院まで百三代、重祚二代齊明と安徳天皇を除きて外、崇神仁賢繼體欽明陽成宇多村上花山一條三條後一條後朱雀後冷泉後三條堀河二條六條後深草伏見後伏見崇光稱光の廿二陵は、湮沒して其跡もさだかならず、現存七十八陵のうち、十二陵は舊垣あり、六十六陵はこたびあらたに表章せられぬ、此外阿波國麻殖郡木屋平山、同國三好郡白地村雲透寺は、後龜山院の御陵なりと申傳へたり、又同